

中世・関の都市空間とその変遷

森島 一貴

1. はじめに

岐阜県関市は現在“刃物のまち”として全国に知られている。南北朝時代から室町時代初期にかけての公卿である山科教言が応永14年（1407）に書いた日記『教言卿記』に「せきカミソリ」の記述がみられ、剃髪用カミソリや小刀などの日用刃物を生産し、“刃物のまち”として知られていた。現在の関市の市街地周辺に在住した鍛冶職を「関鍛冶」と呼び、13～14世紀より、刀剣や打刃物（剃刀や小刀・鋏など）を製作していたと考えられている。室町時代後期には、刀剣需要の高まりから300名を超える関鍛冶が関で刀剣を製作し、和泉守兼定や関の孫六と呼ばれる二代目兼元などの名工を輩出し、日本刀の産地として全国に知られていた。また、関町は東山道の枝道である飛騨街道、東山道の別街道である木曾川西古道、尾張三河から郡上へ抜ける道が合流するところであり、長良川、津保川の物流なども集まる大きな町であったと考えられている。

本論で検討する関町は、江戸時代の関村のうち、長良川の支流である津保川の北岸に位置し、北側には関城がある安桜山、南側には梅竜寺山、一ツ山、十六所山、力山が東西に並び、この南北の小山に挟まれた東西方向に伸びる平坦地に築かれた町の範囲を対象とする⁽¹⁾。

江戸時代の関町の中心は、安桜山の南側にあったことがわかっている。しかし、関市の「観光拠点施設刃物ミュージアム回廊整備事業」が町の南側で計画され、平成29年に試掘調査をおこない中世の鍛冶遺構や遺物を確認したため、「古町遺跡」として新規に遺跡登録をした。翌



図1 扱う遺跡などの分布 (S=1/20,000)

30 年には本発掘調査を実施し、古い関町の存在の一端が明らかとなった（関市 2022）。

古い関町については古田氏が地名や文献資料から検討し、存在を指摘している。古田氏は関川の右岸に古町・古屋敷という地名が残り、立蔵寺や法然寺などが古町に集中していることからかつての関町の中心地は現在の日ノ出町あたりにあったと推測している。また、関川の左岸にある現在の関の町並みは日ノ出町にあった古い関町から移転した新しい関町の系譜をひくものとし、新しい町に移転し、町が成立したのは永正から天文にかけてであると指摘しているが、具体的には発掘調査、あるいは絵図がでてこないかぎり明らかにすることが難しいとしている（古田 1996）。

平成 30 年の古町遺跡の発掘調査により、地名や文献資料だけではなく、考古資料から関町の変遷を追えるようになった⁽²⁾。今回は、古町遺跡をはじめ、既に確認されている鍛冶関係の遺跡である重竹遺跡の検討及び新しい関の町が描かれている貞享 3 年（1686）の「関村絵図」の検討も踏まえて、中世から近世への関町の転換期の様相をみていきたいと思う。

なお、今回は便宜的に古田氏が指摘している「古い関町」および新たに発掘して明らかになった古町遺跡のことを「旧関町」とし、現在の町並みに続く「新しい関町」を「新関町」と定義しておきたい。

2. 関町に関わる遺跡の検討

（1）古町遺跡

古町遺跡は関市平和通 4 丁目に位置する遺跡である。平成 30 年に「観光拠点施設刃物ミュージアム回廊整備事業」に伴う発掘調査により、中世の町や鍛冶作業に関する遺構が見つかった。この遺跡は「旧関町」にあたるもので、中世の町の様相の一端を知ることができるようになった。

古町遺跡は関鍛冶の氏神である春日神社の関川を挟んだ対岸に位置する。春日神社の南側を通っていたと考えられる街道が遺跡の中を通り、町並みはその街道に沿って造られていたと思われる。

発掘調査は建物の基礎の関係で、最下層まで調査をおこなわず、現地に保存されることになった。このため、一部を除き、地表面から約 0.8 ～ 0.9 m のところで調査を終えている。

このような状況を踏まえて、町の変遷に関わる遺構を主にして、遺跡の変遷を下記のようにⅠ～Ⅳ期に分けて整理した。

【Ⅰ期】 13 世紀前半から 14 世紀後半にあたる。先にも書いたが最下層まで発掘を行っていないため、様相は不明である。13 世紀前半から 13 世紀中頃にさかのぼる土器がみられることから、旧関町は 13 世紀中頃から 13 世紀末に成立していたものと考えられる。また、1 区 S D 9・10（崖状遺構）や 2 区 S K 81（造成遺構）・S K 82（大型土坑か造成遺構）より一定量の鉄滓が出土していることからⅠ期から鍛冶をおこなっていたものと考えられる。

【Ⅱ期】 14 世紀後半から 15 世紀後半にあたる。調査区は元々の地形が関川に向かって下がっていく場所にある。遺構を完掘していないため、詳細は分からないが、低くなっていくところに位置する 1 区 S D 9・10（崖状遺構）や 2 区 S K 81（造成遺構）・S K 82（大型土坑か造成遺構）など⁽³⁾はこの段階で埋め立てられている。低い場所を埋め立て、土地を確保している可能性が考えられる。

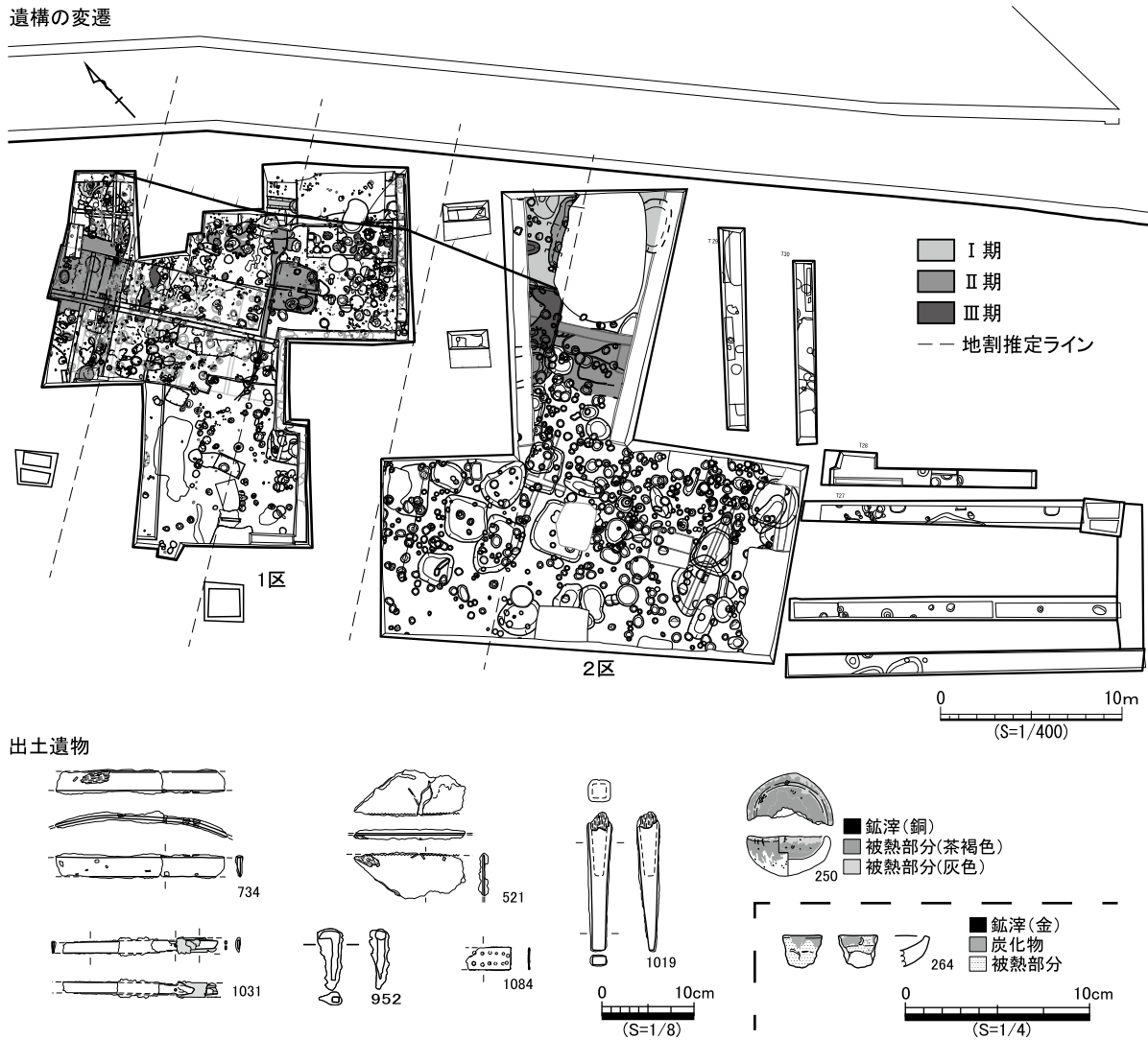


図2 古町遺跡

町域を広げるための大規模工事であると推定される。

【Ⅲ期】 15世紀後半から16世紀前半にあたる。現状では古町遺跡が最も繁栄する段階である。この段階で注目されるのは土地の区画の形成である。当時の道と区画の関係はわからないが、1区では溝、2区では貼床から建物の方向を割り出し、北東方向を軸にした土地の区画がわかる。区画の幅は7.7m程度で、調査区内で東西方向に5区画以上、確認することができる。この段階が街道に沿って町並みが再整備された時期であると考えておきたい。

区画以外で注目される遺構は1区で精錬鍛冶用と考えられる大型炉や作業場跡と考えられる貼床、2区の鍛冶炉であるS K 60などが確認されている。古町遺跡の最盛期の様子を知ることができる遺構である。

【Ⅳ期】 16世紀前半から16世紀中頃にあたる。2区のS K 36など鍛冶作業に関連する遺構が確認されていることから鍛冶は引き続きおこなわれているが、出土遺物は減っている。衰退に向かう時期で、16世紀中頃には旧関町は消滅したものと考えられる。時期の特定はできないが、鍛冶遺構の

上層で集積墓が確認されている。貞享3年(1686)の「関村絵図」では畑となっているが、墓域となっていた時期もあったと想定される。

以上、古町遺跡の変遷をみてきた。遅くとも13世紀中頃から13世紀末には集落が成立し、この頃から鍛冶の町として機能している可能性が高くなった。14世紀後半から15世紀後半には町域の拡大、その後、町の区画の整理などがおこなわれ、町は繁栄していくが、16世紀中頃には消滅したものと考えられる。

出土遺物には短刀の他、釘や座金といった建築に使用されるもの、鋸や鑿などの大工道具が見つっている。また、鎧の小札が出土しており、武具も製作していたと考えられる。刀剣以外にも様々な鉄製品を製作していたことがわかった。また、漆が付着したかわらけ、青銅製品に使用された埴塼、金が付着している埴塼なども出土し、刀装具などの金工製品を作っていたとも考えられる。

(2) 重竹遺跡

重竹遺跡は関市下有知にあり、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。関町から北西方向に約3km離れたところに位置し、長良川左岸の扇状地、河岸段丘一帯に広がる。中世段階の重竹遺跡は12世紀末から集落がみられるようになり、近世初頭17世紀前半まで6期の変遷を経ながら継続して営まれることがわかっている(森島2016・2021)。また、内堀氏が重竹遺跡と周辺の城郭・城下町の様相をまとめ中世から近世にかけての動向を明らかにしている(内堀2021)。

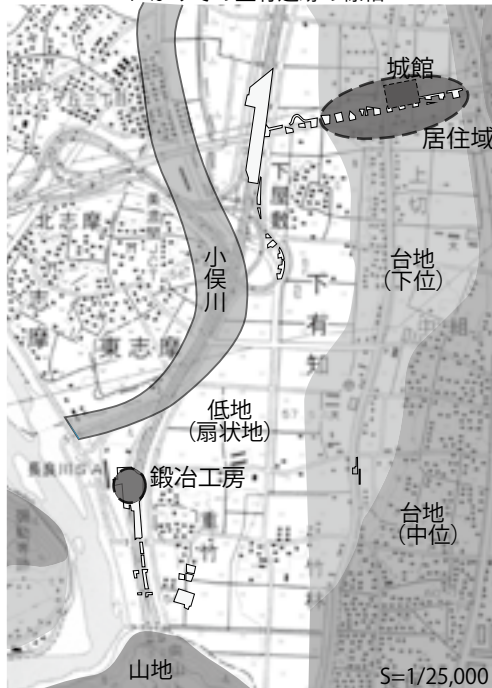
重竹遺跡の中で鍛冶に関連する遺構で注目されるのは、14世紀後半から17世紀初頭にかけて操業していた「鍛冶屋敷」と呼ばれる鍛冶遺構である⁽⁴⁾。遺構が見つかった調査区の近くに「兼定」という小字名があることから、和泉守兼定の屋敷跡ではないかと推定されている。

この遺構は重竹遺跡の南側、下位台地上に位置する。この「鍛冶屋敷」は一辺30～40mの方形の土塁状遺構があり、その内側には火床を伴う建物や焼土、木炭、粘土、鉄滓を伴う土坑などが確認されている。建物は3棟、確認されている。S B 1は東西3間、南北2間の建物である。S B 2はS B 1の北側に並行して建ち東西4間、南北2間の建物で、この建物内から3つの火床(S X 2～4)と鉄滓や焼土などが確認されている。また、S X 2からは石製の羽口が出土している。ここで、鍛冶作業をおこなっていたことがわかる。S B 1とS B 2の間の西側に1間×1間の建物が確認されている。S B 2は鍛冶作業場で、他の2棟も一連の作業場と考えられる。

出土遺物は羽口や砥石、火打金など鍛冶関係のものが出土し、短刀の他に鑿、鎌、鋏、釘などの鉄製品が出土している。大工道具や建築の材料など刀剣以外のものも作っていることは古町遺跡と共通している。

土塁内は鍛冶をおこなう作業場としての機能が濃くみられ「屋敷」という解釈よりは関鍛冶の刀工たちが日本刀をはじめ鍛冶作業を行うための1つの「工房」の単位として考えることができ、以降は「鍛冶工房」と称することとする。小笠原氏が指摘する「小規模に独立した存在」とした関鍛冶の1集団の在り方を示すものであると考えられる(小笠原1997)。

16 世紀前半から 16 世紀中頃
にかけての重竹遺跡の様相



鍛冶工房の出土遺物

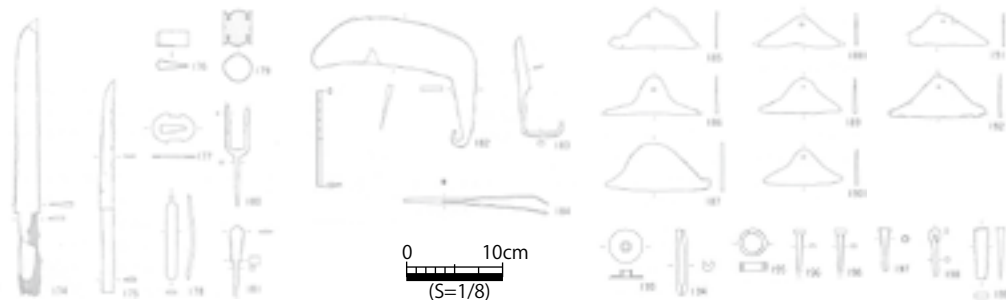


図3 重竹遺跡

3. 貞享の絵図からみた関村

新関町の様相については貞享3年(1686)の「関村絵図」がある。関町が描かれた最も古い絵図で、江戸時代の関町の様子の一端を知ることができる。この「関村絵図」については古田氏が特徴をまとめている。この考察を参考にしながら再度検討していきたい(古田 1996)。

まず、新関町の主ルートは隣接する吉田村の新長谷寺の門前町である大門町から、関村の上り町に入り、直角に北に曲がる。下九日町—上九日町—辻町を通り、現在の本町通りに至ったところで直角に西に曲がり、本壺丁目—練屋町—本三町—郷戸町—五左衛門町—兼景町—利右衛門町—西木戸町を通っていく。新関町の大きな特徴として、この通の南側に東西の通である現在の新町通、春日町の通をつくり、あたかも碁盤の目のような町を形成した。これらの道の両側にピンク色が塗られており、町並みの様子が描かれている。

また、上九日町の西側の区画には「御蔵屋敷」とあり、西側には「御屋敷前町」とある。この「御



図4 『関村絵図』と木戸

蔵屋敷」とは江戸時代の関村領主であった旗本大島家の所在地であったと考えられている。

この絵図で注目されるのは木戸が描かれていることである。絵図には11か所の木戸が描かれている。主な木戸の位置は大門町と上り町の境に木戸Aが描かれ、西木戸町にも木戸Bがある。これは新関町の主となる通の出入り口を示すものであると考えられる。隣接する吉田村との境の東木戸町に木戸Cがあり、上り町の西端に木戸Dがある。その他にも春日町の通と御屋敷前町の南側で交わる辻に2か所（木戸E・F）、新町通と交わる千前町の北側の木戸G、新町通が関川を渡る橋の東側の木戸H、新六丁目の西、貴船神社の前に木戸Iが描かれている。また、木戸は外開きであったと考えられる。この視点で木戸Iをみると木戸Hの外側に位置する。これは元々が木戸Hまでが町内域であり、木戸Iは町域が拡大したあとに設置されたものであると考えられる。また、木戸E・Fの西側、木戸G・Hの南側にあたる場所ものに町域が拡大したときに造られた町並みであると考えられる。よって、貞享3年の「関村絵図」から木戸の位置を通じて町域の拡大を読み取ることができ、木戸A～Hは元々あった町、新関町が誕生した段階の町域を示しているものと推測される⁽⁵⁾。

後に発展したと考えられる区域で注目したいのが、木戸Hの西側である。関町の中心部とは関川を挟んで対岸に広がる場所である。正覚寺より西側、この絵図では新四丁目、新五丁目、在郷五丁目、新六丁目と書かれているが、のちに鍛冶屋町・金屋町と呼ばれるようになったところである⁽⁶⁾。古田氏も指摘しているが、町名が示すように刀鍛冶などが集住したと考えられているところであり、火

災のリスクがあったところでもある。火災の際に関川で類焼を防ぐ目的があったものと考えられる（古田 1996）。

以上のように絵図の町並みが移転当初から完成していたわけではなく、どこかの段階で町域が拡大したと推測することができる。この町域が拡大する時期に関しては周辺の考古学の事象と合わせて 4 章で検討する。

4. 中世から近世にかけての関町の変遷

（1）旧関町の成立

旧関町の成立時期は古町遺跡の出土遺物から 13 世紀中頃から 13 世紀末にかけてと推測した。造成遺構からも鉄滓が出土していることから、当初から鍛冶作業をおこなっていたものと考えられる。この古町遺跡から貴船神社あたりまで、中世に想定される街道に沿って町並みが広がっていたものと考えられる。

古町遺跡から関川を挟んだ東側には春日神社が鎮座する。この春日神社は本殿に残る棟札写に文永 7 年（1279）に今の場所に神社を建てることが決まり、正応元年（1288）に春日大社の分神が勧請されたと書かれている。現在考えている旧関町の成立時期と近く、旧関町と春日神社の成立は無関係ではなかったものと考えられる。

（2）中世から近世にかけての関町の変遷

次に古町遺跡や関町周辺の遺跡、新関町の絵図の検討をもとに中世から近世にかけての関町の様相の移り変わりについてみていきたい。

関町の中世から近世へかけての変遷においては下記の画期が認められる

画期 1：14 世紀後半から 15 世紀中頃

画期 2：16 世紀前半から 16 世紀中頃

画期 3：16 世紀末～17 世紀初頭

画期 1 の 14 世紀後半から 15 世紀中頃は古町Ⅱ期にあたる。元々の地形が関川に向かって下がっていく場所にある 1 区 S D 9・10（崖状遺構）や 2 区 S K 81（造成遺構）・S K 82（大型土坑か造成遺構）などの遺構を埋め立て、土地を確保し、町域を拡大する。重竹遺跡は重竹Ⅲ期にあたり（森島 2016・2021）、扇状地南側に一辺 30～40 m の方形の土塁状遺構をもつ「鍛冶工房」が造られた。関町周辺でも刀剣の生産が行われている事例といえる。

この時期は国内の戦乱や日明貿易において刀剣の需要が急増していく時期であった。特に応永 8 年（1401）から始まった日明貿易は、永享 4（1432）と同 6 年（1434）の時は 3000 把だった刀剣の輸出が宝徳 3 年（1451）には 9968 把、寛正 5 年（1464）には 30000 余把となり、かなりの本数が明国へ輸出されている。刀剣の産地の内訳は不明であるが、関鍛冶も相当数輸出していたものと考えられる（田中 1961・古田 1999）。

旧関町の状況をみると、関鍛冶の数は応永年間（1394～1428）には 43 人であったが、正長～

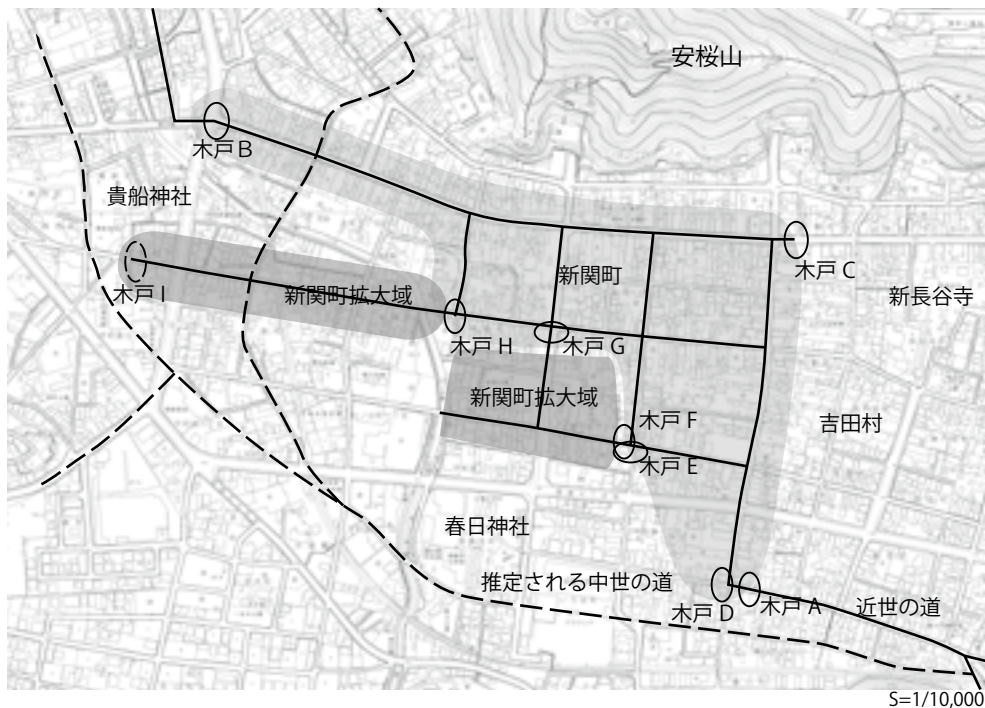


図5 新関町の様相

長禄年間（1428～1460）は132人と大幅に増加していることがわかる（古田1999）。古町遺跡で見られる町域の拡大は、急増した刀剣の需要と関鍛冶の増加に対応するためのものであろう。一方で、旧関町だけでは手狭だったため、重竹遺跡の鍛冶工房のように中心部から離れたところに工房を造り、生産をおこなっていたものと考えられる。このような工房は重竹遺跡だけではなく、周辺に点在していたと考えておきたい。

このように旧関町において刀剣の需要が増加する時期に『金子氏歴由記』によると、永享5年（1433）には金子孫六によって春日神社が再建されるとある。関鍛冶の氏神である春日神社の復興を図っているのは注目される。

画期2は16世紀前半から16世紀中頃にかけて古町遺跡が衰退し、消滅する時期である。古町IV期で、鍛冶に関連する遺構は確認されているため、鍛冶作業は行われているが、出土遺物も減少し、衰退にむかっていると考えられる。しかし、この現象は関町全体が衰退しているのではなく、新関町への移行期であると考えられる。新関町の成立時期についての文献資料はなく、発掘調査も行われていないため、直接的な資料はないが、古町遺跡の状況から16世紀前半から16世紀中頃に新関町が成立し、移転したものであると評価しておきたい。16世紀中頃には完全に移転し、古町遺跡をはじめとする旧関町の町並みは消滅したものと考えられる。

画期3は16世紀末から17世紀初頭であり、重竹遺跡の鍛冶工房が消滅する段階となる（森島2016・2021）。これは豊臣秀吉が行った刀狩令、関ヶ原の合戦などを経て、刀剣の需要が大幅に減ったことと、戦国時代から江戸時代にかけて各地で城下町が造られることが関連していると考えられる。

特に、関鍛冶たちは各地の城下町に安定した需要を求めて移住し、分散していった（得能 1975）。なお、各地に分散していった関鍛冶たちは新刀期における地域の鍛冶の核となり、このため、新刀期の鍛冶の7割以上は美濃伝の影響を受けていると言われており（得能 1975）、かなりの数が全国に移住していったと考えられる⁽⁷⁾。

一方で、各地の城下町へ移住しなかった関鍛冶たちは、仕事を求め、重竹遺跡のような関町周辺の鍛冶工房から新関町へ移り住んだと思われる。移り住んだ関鍛冶たちは町の中心と関川を挟んだ新四丁目、新五丁目、在郷五丁目、新六丁目に集住することになり、木戸Hの西へと新関町が拡大したものと考えられる。古町遺跡及び重竹遺跡からは釘などの建築の材料、鋸や鑿といった大工道具が出土していることから、製作していた鉄製品は刀剣だけではなくたことがわかる。移住してきた関鍛冶たちは、刀剣を作りつつも建築材料や大工道具などの鍛冶を行うのが主となっていったと考えられる。このような背景があり、この地区は、後に鍛冶町・金屋町と呼ばれるようになったのであろう。

5. さいごに

中世から近世にかけての関町の変遷を見てきた。

さいごに関鍛冶にとって重要な位置にある春日神社と関町の関係をみておきたい。春日神社は、旧関町成立段階に近い時期に創建され、画期1の旧関町の拡大の時期に金子孫六によって再建されている。関町が大きく動く時期に、関鍛冶たちが春日神社と強い関係をもつようにしていると思われる。関鍛冶たちにとって春日神社の存在は大変大きいものであったのであろう。

古町遺跡の出土遺物から、旧関町の成立は13世紀中頃から末にかけてと推測した。その後、14世紀後半から15世紀中頃（画期1）には旧関町の町域が拡大、周辺に工房が展開した。16世紀前半から16世紀中頃（画期2）に旧関町から新関町への移転、16世紀末から17世紀初頭（画期3）にかけて周辺にあった工房が解体、一部は新関町へ集住し、今の関町の前形が整えられたと思われる。このような町の変遷は国内の戦乱の状況、国際貿易など歴史的現象に連動していると考えられる。一地方都市でありながら、「日本刀」を通じて中世から近世にかけて町を造り変えるなど翻弄されてきた様子を見ることができ、全国的にみても稀な事例であると思われる。

このように遺跡と絵図を手掛かりに町の変遷について検討してきた。この変化を主導したのは誰なのかは問題となるが、文献資料から読み取ることはいできない。鍛冶仲間で春日神社を本所として座組織に準じた組織を造っていたと考えられており（得能 1975）、その組織によって町も運営されていた可能性もある。このことについては今後の課題である。

謝辞

関町を調査するにあたり、山村亜希氏には現地にて様々な知見をいただき、心より感謝申し上げます。本稿を成すにあたり下記の方々にお世話になりました。記して謝意を申し上げます。

伊藤聡、佐藤敦、江西奈央美、島田崇正、吉田美香（順不同・敬称略）。

註

- （１） 行政区域としての関村は明治 22 年に関町となり、大正 10 年に吉田村を編入した。その後、近隣の町村との合併を経て、平成 17 年に現在の関市となっている。
- （２） 古町遺跡から現在の関の町への変遷について考察をしたことがある（森島 2021）が、古町遺跡の報告書が刊行され、遺構の年代について見直しが必要となったため、今回改めて考察をおこなう。
- （３） 完掘していないため、1 区 S D 9・10（崖状遺構）や 2 区 S K 81（造成遺構）・S K 82（大型土坑か造成遺構）は遺構か自然地形か判断は難しい。このため報告書に従い遺構として表記した。
- （４） 扇状地の居住域の東側に鍛冶遺構が確認されている。この鍛冶遺構は釘が主であり、中世重竹遺跡の建物を築造する際に使用される道具などを製作していた鍛冶であり、今回扱う刀剣を製作する鍛冶集団と異なると判断したため検討対象から外した。
- （５） 2021 年 1 月 24 日に山村亜希氏の講演会「絵図・地図から読む関のまち」（関市わかさ・プラザ学習情報館多目的ホール）において木戸と町の拡大についての関係は指摘している。
- （６） 「関村絵図」の新四丁目が現在の金屋町、新五丁目が鍛冶町となる。金屋町、鍛冶町という町名は江戸時代の文献では確認することができない。明治時代になってから町名の変更があったと考えられる。
- （７） 『新修関市史 刃物産業編』によると天文年間に 18 人、文禄年間に 9 人、慶長年間に 22 人の関鍛冶が各地の城下町などに移住していることがわかる（松原 1999）。

参考文献

- 伊藤 聡 2019 「岐阜県関市 古町遺跡（関鍛冶発祥の地）発掘調査成果」『あいちの考古学 2019』
- 内堀信雄ほか 2002 「美濃地域における中世集落の様相」『東海の中世集落を考える—考古学から中世のムラをどう読み解くか—』第 9 回東海考古学フォーラム尾張大会資料集
- 内堀信雄 2021 『戦国美濃の城と都市』高志書院
- 小笠原信夫 1997 「刀剣概説」『特別展 日本のかたな－鉄のわざと武のころ－』東京国立博物館
- 関市 1967 『関市史』
- 関市 1991 『新修 関市史 関市史 資料編近世二』
- 関市 1994 『新修関市史 考古・文化財編』
- 関市 1996 『新修関市史 通史編 自然原始古代中世』
- 関市 1999 『新修関市史 刃物産業編』
- 関市 2022 『古町遺跡発掘調査報告書』
- 関市教育委員会 1984 『重竹遺跡 その三 東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 関市教育委員会 2015 『関市埋蔵文化財発掘調査報告書 平成 21 年度』
- 田中健夫 1961 『和寇と勘合貿易』至文堂
- 得能一男 1975 「終末期の美濃鍛冶」『美濃刀大鑑』
- 古田憲司 1996 「中世の関町」『新修関市史 通史編 自然原始古代中世』

古田憲司 1999 「関鍛冶の成立と発展」『新修関市史 刃物産業編』

松原久男 1999 「関鍛冶の他国移住」『新修関市史 刃物産業編』

森島一貴 2016 「中世関の様相」『中世・近世移行期における美濃の様相』

森島一貴 2021 「中世関を考える～一六世紀中頃の関を景観復元する～」『歴史資料集 織田信長の東美濃攻略を考える』富加町教育委員会

図出典

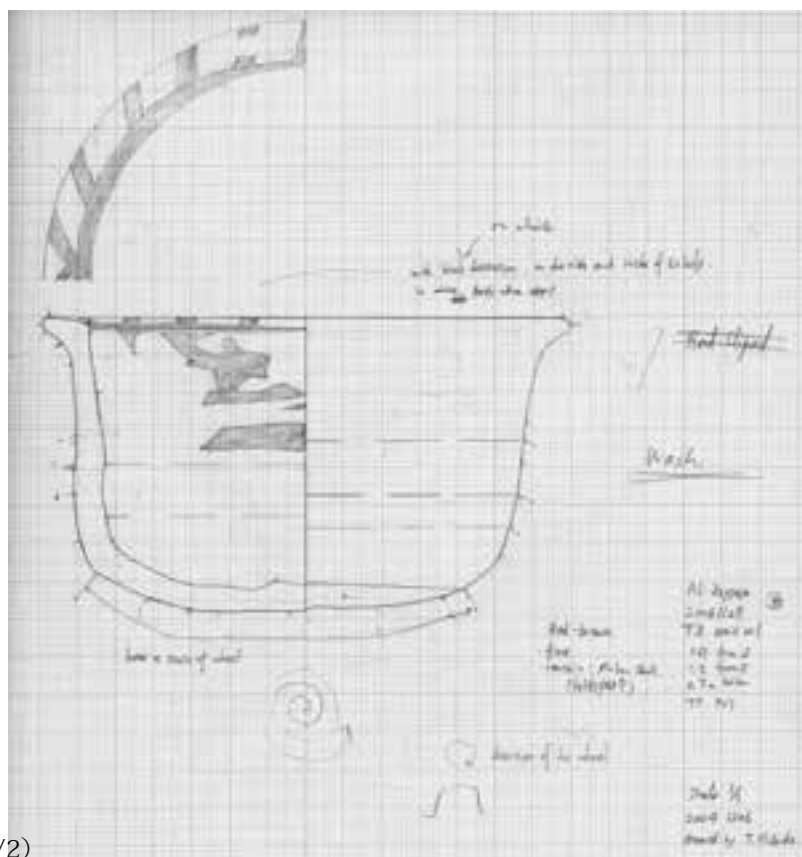
図1 2.5 万分1 地形図「美濃」・「美濃関」より作成

図2 関市 2022 を加筆

図3 2.5 万分1 地形図「美濃」より作成、関市 1994 を転載

図4 関市図書館所蔵『関村絵図』に加筆

図5 関市都市計画図を加筆



(1/2)

エジプト アル ザヤーン神殿出土 ローマ時代土器 実測図原図
 『El-Zayyan 2003-2006』 Edited by Hiroki kamei and Katsura Kogawa 所収、Fig.21]